

## Socialist Morris の誕生

宮 井 敏

世に言う「東方問題」へのコミットメントがウィリアム・モリスにとって生涯の大きな転機となっていることは、かつて指摘したところであるが<sup>1</sup>、それが1856年、22才で Oxford の Exeter College を卒業して George Edmund Street の建築事務所に加わってから1896年に Hammersmith の Kelmscott House でなくなる62才までの40年間の丁度真中に当たる1876年、モリス42才の時の事であり、この年から活潑な社会活動にみちた彼の生涯の後半がはじまると言う一つの転回点をマークしているということであった。

モリスは1894年、和解成った<sup>2</sup> 社会民主連盟の機関誌 *Justice* に乞われて回想の一文を草しているが、その中で「今日私が抱壊している社会主義は、出来ればそれを抱いて死にたいと思っているところの主義であり、そもそもスタートした時からかかげたところのものである」<sup>3</sup> として、socialist としての思想の一貫性を確認し、ついで「私には過渡期と云うものはなかった。もしも、理想ははっきりとつかめていたが、それが実現するというあては全くなかったあのラディカリズムの一時期をそう呼ぶならば別の話であるが」とのべ、「その時期は民主連盟（当時）への加入の数ヶ月前におわる」と記している。モリスの Democratic Federation（のち Social Democratic Federation と改称）への加入は1883年1月のことであるが、これに「先立つ数ヶ月」にあたる1882年秋から暮にかけての期間には、彼の伝記的事実の上からはそれと特定出来る事件や発言は特別には見当たらない。ただあるとすれば Merton Abbey での Morris & Co. の仕事や、アイスランドの飢餓救済委員会での活躍<sup>4</sup>の外に、長女ジュニーの大病という家庭内での出来事<sup>5</sup>が

数えられる位のものであるが、翌1883年にオーストリアの亡命革命家アンドレアス・ショイに宛てた手紙の中で、求められるままに語った半生の回顧の一部として「はっきりしておかねばならぬ事だと思うが、私は常に自ら社会主義団体だと明瞭に公言する組織があればいつでも加入するつもりだったから、昨年ハインドマン氏から民主連盟への参加をすすめられた時にそれを受け入れたのです」と云う一節<sup>6</sup>があり、モリスの内部での自分なりの次の段階への踏み切りが1892年秋頃になされたであろう事が想像される。

それはともかく、彼の後半生の冒頭には、東方問題協会加入の1876年から民主連盟加入直前の1882年までの7年間と云う短かい過渡期が準備期間として3分の1程あり、本格的な Socialist としての活動期である残りの3分の2に対応する形となっている。そして表面的にはこの過渡期が詩人・工芸家としての彼の前半生と、社会主義者、ユートピアンとしての後半生をつなぐ、まさに transitional stage として機能しており、生涯を通じて試行錯誤の中から絶えず発展して来たモリスの思想が最終段階へと大きく飛躍する spring-board となっているのである。

しかしながら、このような見方はそもそもモリスにおける socialism をどう評価するかと云う問題をも含めて、モリス在世中から今日までのおよそ一世紀にわたるモリス解釈史の中で必ずしも終始定説たり得たわけではなく、むしろこの時期も含めて1859年のジェインとの結婚から1883年の民主連盟加入までの24年間を最も充実した最盛期と見、その後の社会活動、講演活動は Kelmscott Press における印刷事業をのぞけば、富裕な詩人の単なるお道楽であるとする見方が支配的であったのである。アイマー・ヴァレンスはモリス没後の新聞論調を分析して、その傾向には二つあり、一つはそもそも社会主義への感情的憎しみから彼の人となりや業績を故意に過少評価しようとするもの、今一つは彼らにとって不快な事実は出来るだけ履歴の背景に押込めて、それを単なるエピソードとするか、モリスのあり余る慈悲心が不幸にして彼を屈服させたやむを得ぬ人間的弱点だとするか、の二つであったとのべてい

る。<sup>7</sup>また、文体、規模、論調から見て十九世紀イギリス文学の中でも伝記文学の白眉とされてよい、マッケイルの伝記の中でも、「彼をよく知っている人々ですらモリスの社会主義はまことに唐突で説明のつかない脱線だと考えた。せいぜいよくてそれはモリスが事態をよく考えもしないで熱狂にかられて、或は性急な衝動から突入して行った一つの運動だと想像したのである」<sup>8</sup>として、19世紀イギリスにおける社会思想の流れの中で、大きな社会的動きと照合させつつモリスの思想を展開的にとらえるという努力をまったく放棄してしまっているのである。<sup>9</sup>

この点1955年に出たトムスンの大著は従来の通説に根本的変更を迫り、19世紀イギリスの社会思想史の上で社会主義者モリスの思想を正しく位置づけ、かつその内容と展開をあきらかにするという、モリス研究史上まことに劃期的な業績をなしとげたのである。しかるにタイムズ文芸付録の書評子は「モリスとマルクシズム」と云う標題の下にこの書物をとり上げ、まことに偏見にみちた批判を下した。「この長い退屈極まる書物の序文で、著者はまず読者にこの書物はウィリアム・モリスの伝記というよりは研究であると言うが、不適切なほどの長さにもかかわらず、これはモリスの研究と呼べる代物では断じてない。と云うのはトムスン氏が今日次第に無視されつつあると考えるモリスの社会主義理論のみをとり扱っているからである。実際氏は今日ではおよそ当を得ないモリスの業績のみに集中している。このような計画には当然公平な態度が前提条件となるが、トムスン氏が公平を欠くとか、党派的だとか云う事すら、まだ控え目な云い方となろう。ひどいマルクス主義的偏見にみちたこの書物は、怒りっぽい調子で900ページもつづき、モリスをマルクシストだと思えない人々を「中産階級の俗物」だときめつける。……50年も前に出版されたマッケイルの伝記が今なお標準的な評伝であるとは云え、現代にふさわしいモリス再評価の仕事がさらにあって悪いと云うのではない。がトムスン氏の仕事はむしろ今日忘れてしまった方がよいようなモリスの面のみ強調している。……氏は没後のモリスは「中産階級の俗物共」の仕

組んだ陰謀の犠牲者だったというが、もしその陰謀なるものがモリスの社会主義と散文のロマンスを捨てさり、その詩とタペストリと印刷のみを残すと云うのであれば、それこそこんな都合な事はないではないか、云々」<sup>10</sup>

これに対して一週間後直ちに痛烈な反論が同紙に掲載された。投稿者は「政治的イデオロギーの点でトムスン氏と同じサイドに立つ人間であるから、不当な党派性を云々されるかと思いいささか躊躇したが、トムスン氏の著作を再度読み返して見て、この書評はどうしても見過せぬ偏見から書かれていると思ひ筆を執った」と云い、「評者がモリスの社会主義理論をあぶなっかしいと感じるのは自由だが、この書物の豊富な考証、良心的な学識、文芸批評家としての見識は正当に評価すべきだし、トムスン氏が従来に通説をくつがえして、モリスの社会主義を再評価しようとする態度に党派性がないとは云わぬが、それは綿密な考証立論に立っての事であり、それを十分な反証をあげないでただ感情的に攻撃すると云うのはそれこそ党派的で、評者がトムスン氏に要求している公平さを欠く事になるのではなかるうか」<sup>11</sup>としてさきの書評子のいわれなき偏見を真向から否定してみせたのであった。

E. P. Thompson の *William Morris, Romantic to Revolutionary* (London: Lawrence & Wishart, 1955, 980 p.) の書評をめぐる一連の応酬は以上の如くであったが、ここに、はしなくもモリス在世中から少くとも1955年まで続いたモリスの社会主義に対するひろく広まった感情的反撥と偏見、云うところのモリス神話の実態があり、同時にまた理路整然と俗説を正し、モリスの社会主義理論の一貫性と科学性を実証して見せたトムスン説の確立が示されている訳である。

ではそのような誤解はどうしておこったか。元来ロマン派詩人の言動そのものが衝動的、情緒的で一貫した脈絡がなく、一つの原則で分析しにくい上に、とりわけモリスのように多彩な工芸活動に加えて活潑な社会活動をすれば、その行動について種々の誤解を生じるのも無理もない事かも知れないのであるが、まず第一に上げられるモリス神話発生の原因は TSL の書評子の

云う「中産階級の俗物」のもつ世界観であろう。19世紀イギリスのブルジョワジーは体制として権力を掌握したとは云い条、意識において支配層たる自覚が充分でないために、自己の安定と繁栄をおびやかすものに対してはきわめてヒステリックに対応し、とりわけ労働組合と社会主義思想に対してはあからさまな敵意を示したから、もとは自分たちのサイドの出身であるモリスのさまざまな活動のうち、無害な工芸<sup>12</sup>と詩作のみをとり上げて、社会主義的側面を故意に無視した事は或意味で当然の事であった。一方またモリスの側にも問題はあり、財政に余裕のあるボヘミア的ロマン派詩人の奔放な行動の軌跡には説明のつき難い面が少なくない上に、モリスの社会主義思想におけるマルキシズム受容の問題が事を一層複雑ならしめていたのである。彼が詩人としての直感から、また工芸家としての実感から、社会的関心の拡大と共に自己内部でひそかに育てて来た社会主義的発想を、マルクスの『資本論』、エンゲルスの『空想より科学へ』との出会いによって、次第に Communism へと発展させて行った過程は、今日からみれば充分に説明のつく、極めて自然なものであるが、19世紀ブルジョワジーの見地からすれば、モリスにおけるマルキシズムのファクターはなるべく矮少化して見ようということになる。例えばマッケイルは自著の中で、前記“How I became a Socialist”から「私は『資本論』の歴史についての箇所は充分にたのしんだが、この偉大な書物の純粋に経済学に関する箇所を読むに当って、少なからず頭脳の混乱に苦しんだ事を告白しなければならない」<sup>13</sup>という一節を引用するに際して、上記下線の部分を省いて紹介したりしている。またグレイジャーも、或時モリスがマルクスの価値論について訊かれた際に「正直に云ってまるっきり知らないし、知ろうとも思わない。私はマルクスの理論は理解しようと努力はしたのだが、どうも経済学は得意じゃないのでね。それでも私は自分では社会主義者だと思っているし、私にとって経済学は怠惰な階級が金持で、働らく階級が貧乏で、金持は貧乏人から収奪するから金持なんだ、と云う事がわかれば充分なのだ」と答えたという挿話を紹介している。<sup>14</sup>

さて、『資本論』に接する場合、商品と貨幣の分析にあてられた第一巻第一一篇のはじめの三つの章、とりわけ第一章が全体のなかではもっとも難解であると云うのが定説であり、マルクス自身第一巻々頭の「第一版への序文」の中でその事をみとめている程である。<sup>15</sup> 長短疎密さまざまな解説書が氾濫している今日でさえそうなのであるから、あまり完全とは云えない初期の仏訳で、権威ある解説書もなしに、あまり正確とは云えない周囲の人々の助言のみで、社会科学の訓練もなしに読み進んだモリスの苦労たるやまさに想像を絶するものがあつたであろう。それはあたかも、「死海文書」も発見されていない時代に、あまり正確とは云えないウルガタ訳で旧約聖書をよみ進んだであろう初期の宗教改革者たちの労苦に比すべきものがあつたとおもわれる。またモリスは「歴史についての箇所は理解出来た」と云うが、『資本論』を読むにあたっての助言を求めて来た友人に宛てた返事の中で、マルクスはまず「労働日」「協業、分業及び機械」を、最後に「本源的蓄積」に関する部分を読むようにと答えている。<sup>16</sup> これら8章、11章、12章、13章、24章はいつれも歴史的叙述の多い、読みやすい事でも知られている箇所であり、これら諸章の理解だけで、少くとも資本の本源的蓄積の意味や、剰余価値発生メカニズムに通じるが出来た筈である。従ってモリスの読後感は今日から見てもまことに当然の率直な感想と云うべく、この発言が毫も当時のモリスのマルクス理解を否定する証左とはなり得ないものと思われる。同様に価値論についてのエピソードでも、膨大な体系的思想のうちの商品の使用価値と交換価値についての甚だ厄介な議論<sup>17</sup> に完璧に精通しなければ何一つ発言出来ない、などと云うような事はあり得ないわけであり、もともとこれらの言葉が新しい思想体系に対する謙虚な気持から発したものだと見れば、モリスのマルクス理解がこれらの言葉からおし測る事が出来ないのはあきらかであろう。

さらに又、当時のマルクス主義文献の資料不足にも留意しなければなるまい。モリスは滔々たる産業主義の時代にあつて、次第に労働者の疎外状況に気付き、「よろこびとしての労働」というユニークな労働観を形成してゆく

のであるが、その状況を「労働からの疎外」、「生産物からの疎外」、さらには「類的存在から疎外」とすすんで分析する事なく 畢ってしまっている点がある。今もしモリスがマルクスの『経済学・哲学草稿』を読み得ていたならば、それは比較的容易な事だったに違いない。しかるに『経哲草稿』、とりわけ疎外を論じた第一草稿の後半部は1844年にはすでに書かれていた筈ではあるが、これが世に出たのは20世紀に入ってからの事であったから、<sup>18</sup> 1896年になくなるモリスにとっては接する事の出来ない文献であった訳である。

さて、こうした状況からモリスのマルクス主義受容にはさまざまな時代的制約があったのであるが、加うるに多様な解釈を快しとしなかった初期のマルクス主義の祭司たちは極めて教条主義的な立場に立ち、己の理解をこえる考え方はみとめようとしなかったために、肝腎のマルクシスト達からもモリスはお墨付きを貰う事が出来なかった。よく引用されるマルクス、エンゲルスのからかい気味のモリス評<sup>19</sup> が彼等の評価の典拠であり、そうした事からもモリスの社会主義思想を社会思想史の上で正しく位置づける試みが久しくなされていなかったのである。

そして1950年代にはじまるスターリン批判と中ソ論争はマルクス主義の多様な解釈の可能性をうみ、ひいては white communism の中での Anglo-Marxism の復権をもたらし、そうした国際的な Marxism 解釈の多様化を背景としてはじめてさきのトムソンのモリス新解釈が出現したと見る事が出来るのである。

ところで、フランス革命につぐナポレオン戦争との対応を終えた19世紀初頭のイギリスでは、産業革命のもたらす産業優先主義がさまざまな形で社会のひずみをうみ出していた。大工場周辺部への過度の人口集中の結果としての農村地帯の過疎現象、伝統的風俗の消滅、都市部での過密人口のもたらす疾病、貧困、社会不安、工場公害による自然の破壊、資本投下による乱開発、と云った社会の被害状況と、功利主義を理論的支えとした、加害者であるブルジョワの金権的体質と無節操な言動等々のさまざまな社会的矛盾を最初

に直感的に感じとったのは一群のロマン派の詩人たちであった。産業主義に侵蝕される芸術の領域を死守すべき彼等はブルジョワジーの功利主義的発想と対決するが、同時にそれは彼等のもつ散文的体質との対決でもあった。18世紀半ばに擡頭して来る新興市民階層は、ようやく些かの閑暇を得て衛示的に文学的教養に憶懐を抱くが、元来古典的素養に乏しく、かつリアリストであった彼等は詩の世界を敬遠して彼等の同類を主人公とするリアルな小説に奔り、ここにブルジョワを讀者とし、ブルジョワを主人公とし、ブルジョワを筆者とする近代小説を生むに到った。18世紀のアンチテーゼとしての19世紀を前衛的に担うべき彼等ロマン派の詩人には、産業主義の元兇としてのブルジョワジーと、散文精神の支え手であるブルジョワジーという二つの側面での対決が必要だったわけである。ところが、彼等の多くは元来ブルジョワの出身であったため、この問題提起は一種の内部告発の形をとり、加えて強烈に個性的である彼等に組織行動がとれる筈もなく、体制側の頑強さとも相まって、彼等は次々と転向してゆき、一定の歴史的役割を果して消え去る。これを継ぐものはさらに切迫した危機感に駆り立てられて、保守的正義感をかざして右サイドからのブルジョワ批判を行なおうとする哲人カーライルと、美の破壊をキリスト教倫理によって防ごうとする美術評論家ラスキンであり、更には工芸の場で疎外されざる労働を確保しようとしたモリスであった、という事になるのである。

カーライルはカルヴィニズムを載くスコットランド長老派のきびしい宗教的秩序感から、産業界の無秩序と権力内部の腐敗、支配者層の指導性の欠如を嘆いて、旧約聖書の予言者イザヤ、エレミアのような古風な饒舌を用いて盛んに攻撃してやまない。強力なリーダーシップを待望して英雄崇拜を唱え、暴力を積極的に肯定してフランス革命を礼讃し、議会制民主主義の形骸化を糾弾してチャーティストを称揚する。とりわけ1843年の『過去と現在』<sup>20</sup>では理想の「過去」をかかげて墮落した「現在」を論難し、道義的「過去」によって没倫理的「現在」を矯正しようとしたのであった。



この書物は12世紀に実在した修道僧 Jocelin が monk-Latin で書きのこした年代記を、古代英国の古文書複製団体である Camden Society が1840年に収録出版した *Chronica Jocelini de Brakelonda*<sup>21</sup> から着想を得てあらわした一部小説風の社会評論で、第二巻の「過去」を中心として、第一、三、四巻の「現在」を前後に配置するという構成をとっている。“The Ancient Monk”と題する第二巻では Jocelin の年代記に基いて、9世紀に Suffolk 州 Bury St. Edmund に創設された修道院での祈りと労働の明け暮れと、平修士 Samson がえらばれて修道院長となり、すぐれた指導性を発揮してこの修道院を隆盛にみちびくという話を理想の「過去」として置き、衆愚政治に墮した民主々義制度の悪しき側面、自由放任の資本主義体制の行き詰り、それらのもたらす道義の頹廢、貧富の格差の拡大、労資の紛糾などを分析検討した第一巻“Proem”，第三巻“The Modern Worker”，第四巻“Horoscope”を「現在」として対置している。

元来聖職志願でオックスフォード大学ではオックスフォード運動の余波を蒙り、国教会高教会派からローマカトリックに転派しようとして、全遺産を修道院創設に捧げようとさえしたモリスのことであるから、この書物のとりわけ第二巻に惹かれ、ついで残余の論説の語るはげしい資本主義批判に感銘したであろう事は想像にかたくない。この『過去と現在』が出版された翌年の1844年1月には当時マンチェスターにいたエンゲルスが「イギリスの状態」と題してかなりな長さ（邦訳 マルクス・エゲルス全集で33ページ）の書評<sup>22</sup>をマルクスに書き送っている。そして、当然の事ながら、ここには社会主義的発想が見られぬことや、カーライルが「需要供給競争、拝金主義の不十分さをみとめ、土地所有の絶対的正当性も主張していないのに、なぜこれらの前提から単純な結論をひきだして所有一般を否定しない」<sup>23</sup>のかをなげきながらも、エンゲルスはこの書物のもつ資本主義経済攻撃のはげしさと鋭さに再三讃嘆の声を放っている。これが当時パリに在住してイギリス経済の分析に日夜なかつたマルクスに多大の感銘を与え、この年執筆の前記『経

哲草稿』第一草稿中の賃労働者の疎外認識の一つの資料となったといわれているのである。

一方ラスキンの場合、芸術と社会の相互的連関をその美学の基礎にすえ、芸術作品は芸術家の全人格的表現であり、同時にその芸術家のすむ社会の集中的表現であるととらえ、そのゆえにこそ悪しき産業主義の破壊の手から美の世界は守られねばならず、その社会悪とたたかうにカルヴィニズムの厳格主義を以てしようとしたのであった。モリスがオックスフォード大学に入学した時には、すでにラスキンの『近代画家』と『建築の七灯』は出版されており、前記『過去と現在』とならんで学生時代の愛読書になっていたが、とりわけ1853年に完結した『ヴェニス石』全三巻<sup>24</sup>は生涯にわたってモリスに大きな影響をのこすことになった。この書物はゴシック建築様式を包括的に再評価しようとしてあらわされたもので、第一巻はヴェニス建築の基礎を、第二巻はヴェニス諸宮殿の分析を、第三巻はルネサンス建築に到る墮落の径路の研究に宛てられているが、就中第二巻第六章にあたる「ゴシックの性質」はモリスの社会主義的芸術思想の基礎となったのである。この章においてラスキンは、お互が知悉している成員より成る適限内の有機的結合に立つ小集団において、成員全部が熟知している作業の最終目標に向って、お互の不完全さを補ないつつ行なう労働、とりわけ建築作業においては疎外が発生しないこと、そうしたよろこびを通じての仕事には結果は如何に不完全であろうとも、また、*savage, changeful, grotesque* であろうとも、そこには比類なき美が存することをあげて、ゴシック建築を彼の美的思想の理想としてかけたのであった。幼少の頃から中世社会にあこがれ、大学にすすんでは中世史を学び、チャーサーを愛読してやまなかったモリスにとっては、中世の再評価をせまるラスキンの論旨はまことに快く耳朶をうつものがあつた筈である。そして一時は建築家を志したモリスには、ゴシック建築の社会思想史的分析はカーライルの晦渋な文体、暗い怨念以上に強い影響をのこしたのであった。さて、以上に見られる如くモリスはカーライルからは資本主義経済批判の

目と、祈りつつ働らく修道院での無私無欲の労働のさまを学びとり、ラスキンからはゴシック建築の美と疎外なき労働の相を学んだのであるが、両先達とは異なり、元来はロマン派の詩人であったモリスにはこのレッスンはまことに貴重なものであった。はじめモリスは眼前の19世紀イギリス社会の巨大な矛盾に直面して、おそるべき文明破壊から美の世界を守ろうとして、せめて産業主義の毒牙の及ばない自然の世界で美をうたうか、産業の手の届かない中世の世界に遊ぶか、によってまず消極的抵抗を示そうとした。しかるに抵抗すべき体制はあまりにも強固であり、批判は現実のものとはなり得なかったために、目前の現実から離れて過去の世界を回顧的に提示するか、未来の世界を展望して予言的に語るか、しか方法はなかったわけである。ところがそうした単なるロマンティストとしての保守的正義感が、19世紀イギリスの社会情勢の進展に伴なって社会的関心を増し加え、次第に改良意識に転化して行く。この時期に書かれ、語られた論文は従っていづれも漸進的ながらはっきりと社会改良を目指したものとなっている。すなわち、1877年の *The Lesser Arts*<sup>25</sup> においては民衆芸術における装飾の根元的意味を問い、芸術史の検討を通して芸術教育を行なう事の重要性を強調した。1879年の *The Art of the People*<sup>26</sup> においては労働問題の解決は労働時間の単純な短縮にあるのではなくて、労働の質そのものの転換にあると云い、疎外なき労働、よるこびとしての労働を提唱し、商業と機械の生み出す消費文明に対しては、「質素な生活」で対抗すべきであるとして道徳的改良策を打ち出した。1881年執筆のこの期最後の論文 *Art and the Beauty of the Earth*<sup>27</sup> においては従来の文明を全面的には否定せず、その枠内において全般的に反抗し、不満を育てることによって問題意識を刺激することを提案したのである。

しかしながら、所詮改良は一時的糊塗にすぎず、抜本的改革とはなえなり。そしてこの改良策の限界は同時に師カーライル、ラスキンの限界でもあった。まことにカーライルはエンゲルスも指摘するごとく、「現代の無根底、内的空虚、精神上の死、不真実」に対して「われわれと同じように生死をかけ

てたたかった」<sup>28</sup>のではあるが、遺憾ながら土地貴族に依拠するトーリー党的立場を最後まで捨て切れず、かつその精神的貴族性が労働者階級への信頼を拒否するために、エンゲルスの云う「はまり込んだ矛盾をぬけ出すためにあと一歩踏みだせばよかった」のが、その一歩がついに踏み出せず、遠くジョナサン・スウィフトを継承する、折角の右からの資本主義批判はついに実を結ぶことはなかった。そして又ラスキンはカーライルにくらべてはるかに経済問題に強く、後者の予言者的迫力とドイツ哲学こそなければ、その精緻な資本主義経済分析は今日なお検討に値するものを持っていたのであるが、その中産階級の立場を捨て切れず、要するにたとえ理論の上だけでも己の属する階級の利害を否定的につきつめて、私有財産制を拒否すると云う事が出来なかったために、その倫理的経済学、道徳的美学はついにブルジョア左派の自己批判<sup>29</sup>たるに留まって、宿命的な限界を超える事は出来なかった。ひとりモリスはマルクシズム受容によって階級離脱を敢行して両先輩の限界をこえ、ミルの裁決に反して社会主義者となり、独自の労働観を展開してゆくのであった。

ルイ・カザミアンは名著「近代英国」<sup>30</sup>のなかで、イギリス人の社会的対応には理知的適応と本能的適応とがあり、両者相交互して英国史上の変化に対応して来たが、とりわけ後者は理知による体制の確立に対する情緒的反動の形となるためにとくに「本能の復讐」と呼んで区別した。モリスの場合、あまりに無味乾燥で宗教的雰囲気乏しいプロテスタント教会には惹かれずに、典礼主義に魅力を感じて国教会高教会派に接近し、ついでローマ・カトリックへの転派を考え、最後は棄教するに到るというのも、ブルジョワ体制批判に当って、カーライルの修道院構想やラスキンのゴシック建築論という右からの批判の側に一たん身をおき、ついで左翼として攻撃する事になるというのも、いずれも理性的、非情緒的体制に対して情緒的に反撥してのち理性的に批判する形を取っている。つまり理知的に適応をすませて確立した体制に対して、「本能の復讐」を以て反応したのち、あらためて両者の矛盾対立をこえて弁証法的に適応しようとした事になるのではなからうか。詩人、工芸家

としてのみの初期モリスに対して、社会主義者として活躍する後期モリスが始まる直前に、社会改良主義者としての中期モリスが短かく介在している意味も又ここにあるとおもわれるのである。

## 注

- 1 拙論「ウィリアム・モリスと東方問題」『同志社大学英語英文学研究』(同志社百周年記念号), 12・13合併号, 1976年3月。
- 2 モリスは1883年1月 Democratic Federation に参加し執行部に入ったが, 翌1884年, 執行部多数と共に脱退し Socialist League を結成した。
- 3 *Political Writings of William Morris* ed. A. L. Morton, (London: Lawrence & Wishart, 1973), "How I Became a Socialist," p. 241.
- 4 J. W. Mackail, *The Life of William Morris* (London: Longmans, Green & Co. 1912), Vol. II, p. 83.
- 5 Jack Lindsay, *William Morris, His Life and Work* (London: Constable, 1975), p. 253.
- 6 P. Henderson ed., *The Letters of William Morris to his Family and Friends* (London: Longmans, Green & Co, 1950), p. 188.
- 7 Aymer Vallance, *William Morris, his Art, his Writings and his Public Life*, (London: George Bell & Son, 1909), p. 305.
- 8 Mackail, *op. cit.*, Vol. II, p. 24.
- 9 発展的把握を放棄したモリス理解は必ず失敗する。
- 10 TLS, No. 2758, July 15, 1955.
- 11 TLS, No. 2786, July 22, 1955.
- 12 またソースタイン・ヴェブレンはモリスの意図をつかみ損ねて, これらの工芸品を資本主義経済下の衛示的消費の一例として排斥した。(Thorstein Veblen: *The Theory of the Leisure Class*, [New York: Mod. Lib., 1934, p120 & f.])
- 13 Mackail, *op. cit.*, Vol. II p. 85.

"I put some conscience into trying to learn the economical side of Socialism, and even tackled Marx, though\* I suffered agonies of confusion of the brain over reading the\*\* economics of that work."

\*I must confess that, whereas I thoroughly enjoyed the historical part of Capital,  
\*\*pure

マッケイルの引用には上記二ヶ所の省略があるが, 中略の表記のない省略は一層の誤解を生む。

- 14 J. Bruce Glasier, *William Morris and the Early Days of the Socialist Movement* (London: Longmans, Green, & Co., 1921), p. 31.
- 15 「何事もはじめがむずかしいという諺はすべての科学にあてはまる。第一章、とくに商品の分析を含んでいる節の理解はしたがって最大の障害となるであろう」。カール・マルクス『資本論』、向坂逸郎訳（岩波文庫）、(一)、p. 11.
- 16 マルクスからルードヴィヒ・クーゲルマンへ。「…奥さんには最初に読んでわかるところは「労働日」、「協業、分業、機械」にかんする箇所、最後に「本源的蓄積」にかんする箇所を指示してあげて下さい。難解な用語についてはあなたが解説してあげるべきです…」1867年11月30日、ロンドン（『マルクス・エンゲルス全集』、第31巻、大月書店 1973, p. 477）
- 17 「したがって価値形態にかんする節をのぞけば、この書には難解だという非難をうけるところがあるとは思えない」。(マルクス、前掲書、p. 13.)
- 18 『経済学・哲学手稿』は1932年 モスクワのマルクス・エンゲルス研究所からアドラッキーの編集で出された『マルクス・エンゲルス全集』（俗称メガ MEGA）第一部第三巻にはじめて収録された。
- 19 cf. 『マルクス・エンゲルス全集』、36巻、p. 100, p. 151, p. 568, etc. とくに、「モリスは名うての心情社会主義者です云々」(p. 466.)
- 20 Thomas Carlyle, *Past and Present*, (New York. AMS Press, 1969)
- 21 *ibid.*, p. 40.
- 22 『マルクス・エンゲルス全集』第一巻 p. 570-603.
- 23 同上書 p. 602
- 24 *The Works of John Ruskin*, Library Edition, ed. by E. T. Cook & A. Wedderburn (London: George Allen, 1904), Vol. IX, X & XI.
- 25, 26, 27 *The Collected Works of William Morris*, ed. by May Morris (London; Longmans, 1910-15). Vol. XXII.
- 28 『マルクス・エンゲルス全集』前掲書、p. 598
- 29 木村正身「浪漫的反抗の政策思想、ウィリアム・モリスの場合」(香川大学経済論叢、34巻4号) 34ページ。
- 30 Louis Cazamian, *Modern England*, tr. by the Author (London: J. M. Dent, 1911), "The Revenge of Instinct (1832-1884)".

**Synopsis****How did Morris become a Socialist?****Bin Miyai**

The social life of William Morris is divided into two parts, each for twenty years. The first half begins from 1856, when he graduated from Exeter College, Oxford, until 1876, when he made up his mind to commit himself to social problems for the first time. Whereas, the second one, beginning from 1876, the year of the entry to the Eastern Question Association, ends in 1896, the year of his death at Kelmscott. At the head of this second half, there is a short period of seven years, during which he tried to be a social reformer under the influence of Thomas Carlyle and John Ruskin. The lessons given by these two conservative reformers were very valuable for Morris, but, these have the fatal limitations as plans for social reform. Reading through Karl Marx's *Das Capital* by the French translation with much difficulties, he gradually became socialistic and tried to be a socialist. So this brief period of seven years from 1876 till 1883 means to be a jumping-board for Morris to be a socialist. In 1883 he became to be a member of Democratic Federation (later, Social-Democratic Federation), and started the latter part of his life as a socialist.